

念力主義

2021. 9. 6

一時期、政治学者の姜尚中氏の著作をよく読んでいたことがある。その姜氏が「念力主義」という話をしていた。それは、東京オリンピック・パラリンピックに関してである。姜氏は、「結局、やれば何とかなるという。私はそれを念力主義と呼んでいるんです。念力を唱えれば何とかなると同じ」と指摘している。

妙に納得してしまった。どうも日本人には、こうした傾向があるらしい。それは、歴史が証明してくれている。客観的ではなく、論理的でもない。なぜそうなるのか。それも重要なことになればなるほど、そうになってしまうのである。

姜氏は、「今、何とかなるというこの念力主義でやっていって、結局、リスクを誰が背負うのか。リスクには必ず責任が伴う。念力主義でやればいいという超楽観論は一体、どこから出てくるのか。その結果として国民が非常に悲惨な状況になったとき、どうするのか。私は責任の取り方を明確にすべきだと思う」と述べている。

学校はというと、念力主義など、もっての外である。超楽観論も楽観論もあり得ない。「石橋をたたいて渡らない」というわけではないが、「石橋を何度も何度もたたいて慎重に渡る」といったイメージである。

もはや、毎年の恒例となってしまったが、台風への対応がいい例である。台風が近づいてくるとなれば、臨時休校にする。しかし、台風の進路がそれ、ほとんど被害がなく、通常の教育活動ができたと思われることは多い。それでも、また台風がやってくると、さほどの躊躇もなく臨時休校となる。生徒の命が最優先、安全が一番なのである。台風に対しては、間違っても念力主義などあり得ない。

では、コロナ禍での対応はどうだろうか。世の中は、国民の命と経済活動、国民の命とオリンピック・パラリンピックとで、長期にわたり苦しんできた。これは、まだまだ続く。

学校も苦しんでいる。生徒の命と教育活動、どちらも大切である。命が最優先なのはもちろんだが、生徒の学びを止めてはいけないことも学校の重要な使命である。台風のようにはいかない。1日だけの臨時休校で済む問題ではない。状況が悪化した場合、休校期間が長期に及ぶことが、この問題をより深刻化させている。

ここには、楽観主義のかけらもない。念力主義など論外である。より客観的に、より論理的に、確かなエビデンス（科学的な根拠）をもとにした判断が求められる。学校というところは、実に多くの命を預かっている所である。それも1日や2日ではない。年に200日以上である。それが毎年毎年続くのである。その責任の重さは計り知れない。